第1分科会

学生ファシリテータ／スチューデント・アシスタント協働型の授業と学び場づくり：実践事例と将来像

報告者

鈴木　陵　京都産業大学　教育支援研究開発センター　コーディネータ

大谷　麻予　京都産業大学　教育支援研究開発センター　コーディネータ

中井　歩　京都産業大学　法学部　教授

指定討論者

山田　剛史　京都大学　高等教育研究開発推進センター　准教授

コーディネーター

鬼塚　哲郎　京都産業大学　文化学部　教授

【参加者　57名】

大学授業の形態は、特定の学部・学科・学年の学生が集う学部専門授業や、複数の学部・学年の学生が混ざり合った環境のもとでの共通教育科目など、実に多種多様である。

本分科会では、①この多種多様な学び場に、同じ学年または上級の学部生がファシリテータあるいはスチューデント・アシスタントとして参画する2つの事例を共有し、それらの取り組みの背景やねらい、運営実態を見聞すること、②そのような取組みに対する高等教育の専門家からのコメントや助言・提言を共有し、意見やアイデアを交わすこと、そして③自身の所属大学等において、どのような取り組みが今後あり得るのかをワークショップ形式により登壇者と参加者が共に考え、言語化を試みること（アクションプランを策定すること）を目的とする。

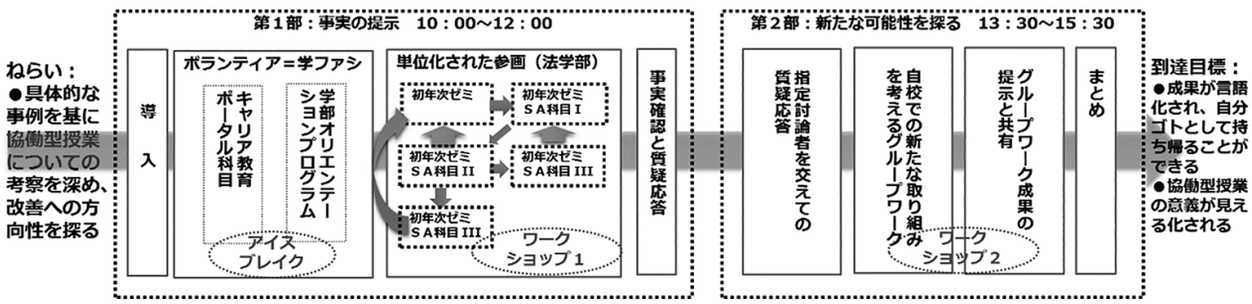
第1分科会

学生ファシリテータ／スチューデント・アシスタント協働型の授業と学び場づくり：実践事例と将来像

京都産業大学　文化学部　教授　鬼塚　哲郎

1．趣旨説明（10：00～10：20）

コーディネータより本分科会の趣旨説明がなされた。受講生でない学生が参画する授業の取り組みが増加しているが、その背景として教授から学習へのパラダイムシフトが進行中であること、学びの共同体を構築するうえで有力な方略だと考えられていること、が指摘された（パワポ資料参照）。次に、本分科会のねらいと到達目標が下図のとおり提示された。



2．協働の実態はどのようなものか　（10：20～12：00）

1）　京産大の特徴であるファシリテーションセンター（F工房）について鈴木氏より説明があった。F工房は「ファシリテーションの学内普及を通じた支援型教育の浸透」を目的として2009年に開設された部署であること、事業の柱として ① 授業運営支援、② 課外活動運営支援、③ 学生ファシリテータ養成、の３つがあること、現在は教育支援研究開発センターに所属し、コーディネータ２名、事務職員２名で運営されていること、が報告された。

2）　京産大「新入生向け学部オリエンテーションプログラム」における学生ファシリテータの活動についてF工房の大谷氏より報告があった。まず、コンピュータ理工学部を事例にとり、学部、F工房、学生ファシリテータの三者がどう協働してきたかが報告された。プログラムの目的は ① 新入生同士が親和的関係を構築する、② 学部の教員、先輩学生らと知り合うことで大学生活になじむきっかけを創出する、というものであり、到達目標は、同級生や先輩、教員らと知り合うことで大学生活にスムーズに移行できる状態になること、と設定されている。プログラムの詳細はパワポ資料をご覧いただきたい。なお、アンケートの結果新入生から高い評価を受けていることがわかったが、プログラムの実施はここ４～５年のことであること、その背景には学部事務室の一職員が新入生の状況に危機感を抱き、学部教員に働きかけ、賛同した教員たちとF工房をつなぐことでオリエンテーションプログラムをめぐる協議がはじまりノウハウが確立していったことが報告された。ここでいう「新入生の状況に対する危機感」とは、親和的人間関係を新入生の段階で構築できなければその分留年や退学の可能性が高くなるという懸念であり、早い段階で学部の持つ資源を集中的に投入し支援することが有効であろうという判断につながったわけである。

3）　京産大「初年次生向けキャリア教育ポータル科目」（以下「ポータル科目」、正式名は「自己発見と大学生活」）における学生ファシリテータの活動について鈴木氏より報告があった。まず、定義として、「授業等でグループワークの円滑な進行などをサポートする学生ボランティアスタッフ」を「学生ファシリテータ」と呼び、F工房が募集とコーディネートを担っている

ことが報告された。主な活動現場としては前述の学部オリエンテーションプログラム、ポータル科目、その他の授業と課外活動、の３つがあり、毎年10月に募集説明会を開き、登録した学生を対象に研修会を複数開催、翌年の３月から４月にかけて現場でファシリテータとして活動し始める。活動の主な受け皿となるのがこのポータル科目である。ポータル科目の目標は「大学という新しい環境をアウェイからホームにする態度形成を支援する」と定義されており、１クラス66名×28クラスで運営され、クラスごとに教員１名と学生ファシリテータ２～３名が張り付く。基本的な授業コンテンツは教科書および運営者向け教本によって共有され、教員同士の情報共有の機会が定期的に設定されている。この授業に参画する学生の役割は ① 授業コンテンツの仕切り、② 話題提供を通じた学生生活のモデル提示、③ グループワークの支援、④ 受講生の見守り・相談相手、と多岐にわたる。学生参画の詳細はパワポ資料にゆずるが、学生参画を可能にした条件として、鈴木氏は ① 学生の自発的な活動が生まれる土壌、② 参画学生の主体性を尊重し、時に学生と教員のあいだの緩衝材となりつつ支援・育成する視点を持つ人・機関の存在、③ 参画学生に対して新入生が抱く「憧れ」が好循環を生む、の３点を挙げている。

4) 京産大法学部「法学部初年次ゼミ」および「初年次ゼミＳＡ養成科目」「初年次ゼミＳＡ実践科目」におけるSAの活動について中井氏より報告があった。

⑴ 学生協働型授業の設置・改編の過程

「法学部初年次ゼミ」(正式名「プレップセミナー」)は現在１年次春学期開講、選択必修、自動クラス割り当て、１クラス25名程度×約30クラスで運営されている。かつては内容が教員によってばらつきがあるなどの課題を抱えていた。学生参画の先行事例を検討した結果、初年次生、先輩学生の双方に教育効果が十分に認められることがわかり、参画する協働学生をSA(Student Assistant)と位置づけ、慎重な議論を経て彼らの活動を単位化することが決定された。その後、授業内容にばらつきを解消するため初年次ゼミ自体のパッケージ化がはかられた。詳細はレジュメ資料を参照されたい。

次に初年次ゼミSA科目の設計に着手した。これには、教員、科目の受講生およびF工房と協働しつつ作成することができた。科目の到達目標は ① パッケージ内容への理解、② 模範的な先輩学生になれるだけの能力と意欲、③ 課題・小論文を添削する能力、④ グループワークを促すファシリテータとしての能力、の４点を身につけることとした。以上をまとめると、初年次ゼミSA科目というアクティブラーニング科目を運営することを通じて初年次ゼミのコンテンツを協働してつくってきたといえる。

⑵ 学生協働型授業が可能となった条件

法学部において協働型授業の単位化が可能になった条件として、①（前述の）「ポータル科目」において学生ファシリテータとの協働が成果を生むことが共有されていた、② 複数の教員がコミットし、個別の実践事例を制度に昇華するための議論が徹底してやれた、③ 協働する学生に成長実感があり、教育効果が認められた、④ ファシリテーションについて相談・依頼できる部署があった、の４点が指摘された。

３．指定討論者からのコメントと質疑応答（13：30～14：10）

お昼休みの後再開し、山田氏より以下のような現状分析および課題の提示があった。詳細はパワポ資料を参照のこと。

1) 背景として、少子高齢化、産業構造の変化に伴い、多様な能力の育成が課題となっており、大学は高大接続、出口管理、アウトカム基盤型教育に注力し、質保証の仕組み導入に奔走している。こうした流れに逆行するように、学生はより受け身になる傾向を見せている。こうした状況を打破し、学生主体の授業設計を推進していくうえで、学生参画（Student engagement）の促進は現代の大学教育の中核となるテーマである。

2) 次に、学生参画の実態を整理して、４つのタイプが提示された。① 大学全体の取り組みとして位置づけされ管理･運営されているタイプ。大規模の実施が可能だが､アルバイトやサークルの延長にとどまるケースも多い。② 特定の部署・個人に一任され管理・運営されているタイプ。属人性が高く、継続性に課題を抱える。③ 特定の部署・個人に一任され、教育的介入を持って実施されているタイプ。学びと成長は大きいが、規模と継続性に

課題を抱える。④ 大学全体の取り組みとして位置づけられ、教育的介入が組み込まれている。継続性は高く、学びと成長も期待できるが、教育効果の検証に課題を抱える。希少な例。

3) 次に、学生参画が拡がらない構造的問題として、① 関わる教職員の私的実践にとどまる場合が多い、② 教育効果の検証が行われず、ディプロマポリシーとの関連が見えないため、執行部を含む他の教職員に伝わらない、③ 大学の組織戦略の中での位置づけが不明瞭で、高等教育政策の俎上に乗らない、の３点が指摘された。

4) 最後に、京産大で効果的に実践されている背景には、① 専門部署が設置され、教育支援と学生支援の双方を担っているため、多様なマッチングが可能となっている、② 正課カリキュラムと連動しており、初年次教育と専門教育の接続にも道が開かれている、③ 関係する教職員が学習・成長パラダイムに依拠している、の３点が指摘された。

４．グループワークに先立つアイスブレイク（14：10～14：20）

学生ファシリテータが開発したアイスブレイクのツールが紹介され、実践された。グループ構成員の名前を用いるため、名前を覚えられる利点があり、初対面の人たちによって構成されるグループ活動に適していると思われた。（パワポ資料参照）

５．グループワーク（14：20～14：50）

これまでの議論をふまえ、「自校で学生協働型授業を新たに導入するとしたら、どう設計するか」についてグループで議論し、ポスターにまとめ、会場に展示して共有する。

６．グループワークの成果の共有（14：50～15：00）とまとめ

各グループから提示された企画を共有する時間的余裕がなかったため、以下に提示する：

グループ名	企画の内容
ア・カンターレ	正課の一環として料理キャンプを企画する。事前学習→当日のプログラム：グループでカレーを作る・研究を知る・仲間を知る・大学を知る→学ぶ楽しさを知る。
東京	正課のサービスラーニングの展開から新たな学びのコミュニティを構築する。キーワードは、単位化、域学連携、事前・事後指導、学生ファシリテータ。
ほっと	教員・学生が他大学とネットワークを構築し、出歩くことで発見があり、そこから継続的な活動につなげられるような仕組みをつくる。
ワクドキ	専門の初年次必須科目の中で意識の高い先輩と交流し、経験が共有できるような授業を設計する。
花粉症	学年間の縦横のつながりを意識したSAシステムを構築する。組織化→研修内容の設計→募集→SA研修→実践→フィードバック→評価→改善、というサイクルで。
KG' S	ファシリテーションスキルを用いつつ、「SAなんて…」という学生が本音で話すことができ、共同体意識が育めるようなダベリ場をつくる。
イタセンパラ	１年前期開講の初年次教育科目にSAが参画する。１クラス（20名）にSAが１名配置され、受講生のプレゼン準備を添削で支援する。事前審査・研修あり。
オールジャパン	自ら問いを持つ学びを学ぶ「ハテナソンセミナー」にSAが参画し、京産大法学部方式で展開していく。
KAFUUN	SAを教職課程科目や理系実習科目に展開していく。教職センターが学生ファシリテータをまとめ、３・４回生が既習得科目の授業にファシリテータとして参画。

（＊夏楽里山、鯖、ドキバラの３グループはカメラの不具合でデータが回収できませんでした。）

7．まとめ

コーディネータの視点から第１分科会の成果をまとめると、以下の３点に集約される。

1） 高大接続、出口管理、アウトカム基盤型教育に注力し、質保証の仕組み導入に奔走する大学の意向とは裏腹に、学生たちはますます受け身の度合いを増しており、山田剛史氏の言葉を借りれば「大学は学生中心のものになっていない」。こうした状況を打ち破る方略としての学生参画は日本の大学にとって中核となる課題である。

2） 参画の方法はさまざまであるが、京産大からは学生ファシリテータおよび単位化された参画の二例が提示された。いずれも学習と成長のパラダイムに依拠した、現状においては希少な取り組みであるが、これらの取り組みで好循環が生まれつつあることの要因として、学生参画に関わる教職員のシャドウワークが自分たちの学び・成長の機会となっている点があげられるのではないだろうか。 ただし、安定性・継続性の観点からは、特定の教職員に負担が集中してしまうことがないように周囲の理解を得ながら組織的に取り組んでいくことが必要であろう。

3） 受講生、参画学生双方での教育効果の検証が必要である。また、ボランタリーベースの活動と単位ベースの活動の教育効果の違いについても今後の研究が期待される。評価の指標は満足度だけでは不十分で、ディプロマポリシーとの関連、留年者・退学者の動向との関連を考慮に入れた指標が必要となる。このような指標に基づいた教育効果の検証が行われてはじめて、学生参画は全学的に取り組むべきものというコンセンサスが生まれてくるのであろう。

第１分科会コーディネーター：鬼塚哲郎（京都産業大学 文化学部 教授）

第23回ＦＤフォーラム
第１分科会

学生ファシリテータ/スチューデント・アシスタント協働型の授業と学び場づくり：実践事例と将来像

● 報告者（発表順）
鈴木　陵（京都産業大学 教育支援研究開発センター コーディネータ）
大谷麻予（京都産業大学 教育支援研究開発センター コーディネータ）
中井　歩（京都産業大学 法学部 教授）

● 指定討論者
山田剛史（京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授）

● コーディネータ
鬼塚哲郎（京都産業大学 文化学部 教授）

本分科会のねらいは……

大学の教育現場で、受講生ではない立場で授業に参加する学生が増えている。

４つの問い：
① 学生参画型授業が増加している背景は何か
② 協働の実態はどのようなものか
③ 学生参画を可能にする協働の仕組みはどのようなものか
④ 協働の成果は何か

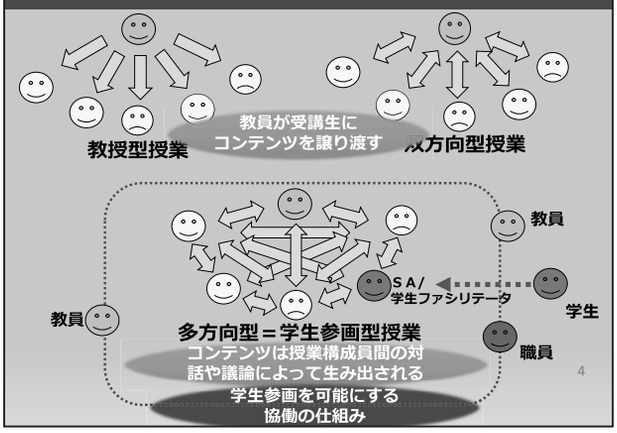
これらの問いに対する私たちなりの実践例を提示し、全員で議論し、将来につなげたい。

定義

● 学生参画授業：
任意の科目に、その科目の受講生でない学生が受講生を支援するために恒常的に参画している授業

● 協働の仕組み：
学生参画を可能にし、実際に運営している仕組み

私たちが描く学生参画型授業のイメージは…



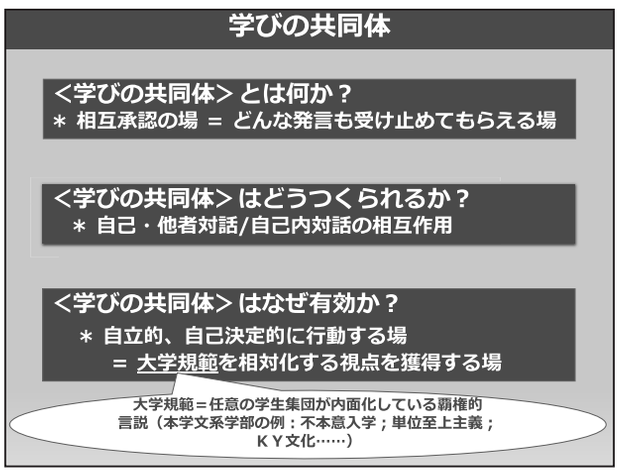
協働型授業が増加している背景は…

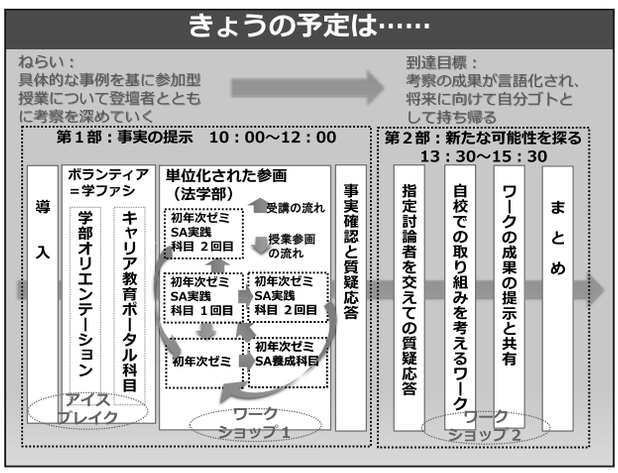
１．教授から学習へのパラダイムシフト

２．学びの共同体構築の必要性

学習から教授へ　教授から学習へ

＜教授＞の枠組み	＜学習＞の枠組み
主語：教授者	主語：学習者
歴史：国民アイデンティティを涵養	歴史：江戸期の寺子屋・私塾/21世紀のキャリア教育・初年次教育
環境：エリート養成のための大学	環境：ユニバーサル化した大学
解へのスタンス：解はすでに存在し、教授者が伝授する	解へのスタンス：解は自ら見出す、もしくは作っていくもの


学びの共同体
＜学びの共同体＞とは何か？
＊ 相互承認の場 ＝ どんな発言も受け止めてもらえる場
＜学びの共同体＞はどうつくられるか？
＊ 自己・他者対話/自己内対話の相互作用
＜学びの共同体＞はなぜ有効か？
＊ 自立的、自己決定的に行動する場
＝ 大学規範を相対化する視点を獲得する場
大学規範＝任意の学生集団が内面化している覇権的
言説（本学文系学部の例：不本意入学；単位至上主義；
ＫＹ文化……）


きょうの予定は……
ねらい：
具体的な事例を基に参加型
授業について登壇者とともに考察を深めていく
到達目標：
考察の成果が言語化され、
将来に向けて自分ゴトとして持ち帰る
第１部：事実の提示　10：00～12：00
第２部：新たな可能性を探る
13：30～15：30
導入
ボランティア＝学ファシ
学部オリエンテーション
キャリア教育ポータル科目
アイスブレイク
単位化された参画
（法学部）
受講の流れ
授業参画の流れ
初年次ゼミ SA実践 科目 2回目
初年次ゼミ SA実践 科目 1回目
初年次ゼミ SA実践 科目 2回目
初年次ゼミ
初年次ゼミ SA養成科目
ワークショップ１
事実確認と質疑応答
指定討論者を交えての質疑応答
自校での取り組みを考えるワーク
ワークの成果の提示と共有
まとめ
ワークショップ２

あいすぶれいく

なまえdeぱずる

1

まずは準備

- 1枚の紙に名前(苗字だけ)をひらがなで書き、隣の人に紙を渡す。
- 以下は同じ。
- 同じテーブルを囲む全員が書き終わったら、
  紙を裏返して机の真ん中に置く。

これで準備はOK

2

それではルール説明へ

- 紙に書いた文字で出来るだけ多くの単語を作ってもらいます!
- 文字は同じものを何回でも使えます♪
- 長い単語ができるとポイントアップ！

2文字➡1点
3文字➡2点
4文字➡3点
5文字➡4点
6文字以上➡10点

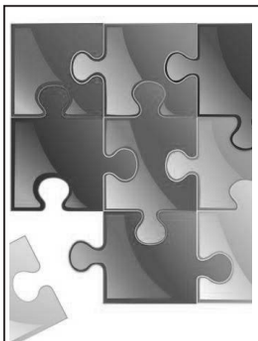
3

例えば…

くろだ
おおはし
ほりやま
ひのいで
にしかわ

おかわり
おはし
いやし

4

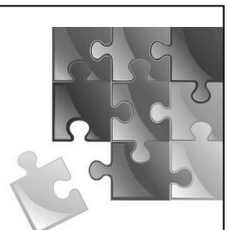


得点計算

2文字➡1点
3文字➡2点
4文字➡3点
5文字➡4点
6文字以上➡10点

5

取扱説明書



- 用意するもの
  班ごとに、紙1枚と書くもの（プロッキー等）
- 制限時間
  1分30秒くらいから（自由に時間調整可能）
- ねらい
  名前を使って遊ぶゲームなので、メンバー同士の名前を覚えやすい

初年次生向けキャリア教育ポータル科目「自己発見と大学生活」における学生ファシリテータ活動の事例

京都産業大学　教育支援研究開発センター　コーディネータ　鈴木　　陵

第２３回ＦＤフォーラム
第１分科会

初年次生向けキャリア教育ポータル科目「自己発見と大学生活」における学生ファシリテータ活動の事例

京都産業大学
教育支援研究開発センターF工房
鈴 木 陵
2018年3月4日（日）

1

発表の流れ

■はじめに
１）F工房について

２）学生ファシリテータについて

■初年次生向けキャリア教育ポータル科目の事例
１）初年次生向けキャリア教育ポータル科目の概要

２）初年次生向けキャリア教育ポータル科目における学生参画

３）学生参画型授業が可能だった条件は？

2

はじめに
1．Ｆ工房について

3

F工房の概要

ファシリテーションの学内普及を通じた支援型教育の浸透！
- 教育から学習へのパラダイムシフト（指導から支援：学習の主体としての学生）
- フラットな関係を基本とした創造の場の創出
- 係わる人々が安心、安全を感じられる場の保障
- 人の「前のめり」を引き出す人材の育成

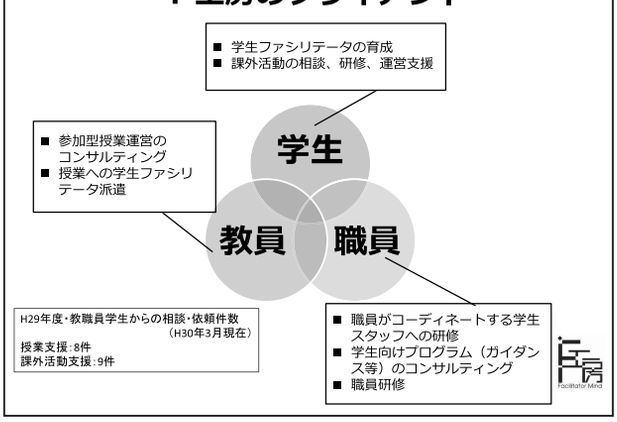
▪ 事業の柱

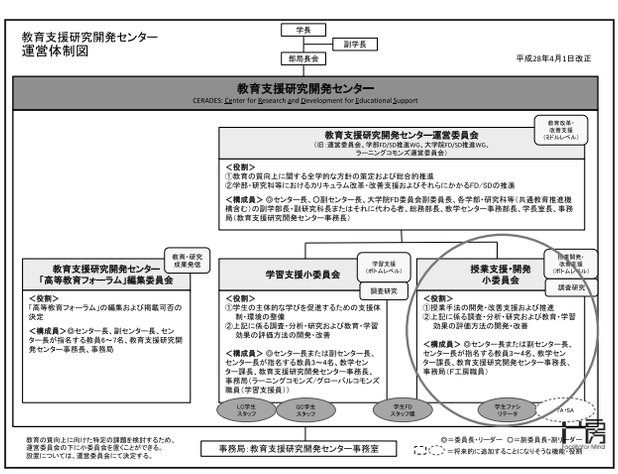
課外活動運営支援　授業運営支援　学生ファシリテータ養成

▪ 運営体制
・コーディネータ２名（嘱託職員）
・事務職員２名（契約職員）
※教育支援研究開発センター全体で職員は17名

4

Ｆ工房のクライアント





場所としてのF工房

はじめに
2. 学生ファシリテータについて

8

学生ファシリテータとは?

授業やイベント等でグループワークの円滑な進行などをサポートする学生ボランティアスタッフ。F工房が募集、コーディネートを担う。ファシリテーションの普及を通じて、学生の主体的な学びを支援している。

- **主な活動現場**

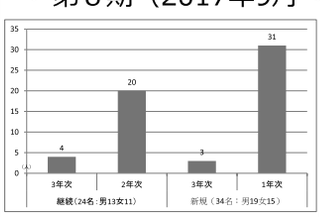
1）学部オリエンテーションプログラム
2）初年次向けキャリア教育ポータル科目
3）その他の授業、課外活動等

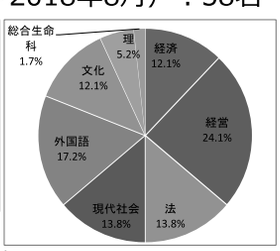
※略称は「学ファシ」

9

学生ファシリテータの現状は？

- 第８期（2017年9月～2018年8月）：58名





●約半数の学生が1年次に活動に参加。
●複数年度活動を継続する学生の割合は50%程度。
●所属学部は、比較的文系学部の比率が高い。

（2017年10月時点）

10

学生ファシリテータの活動スケジュール

- 10月
- 11月
- 12月
- 1月
- 2月
- 3月
- 4月
- 7月
- 8月

①募集説明会
②事前研修（１）
④事前研修（２）
⑤学部オリエンテーションプログラム運営支援
⑥「自己発見と大学生活」運営支援
⑦活動全体のふりかえり

希望者はその他の授業、課外活動でのファシリテーション活動に参加。

11

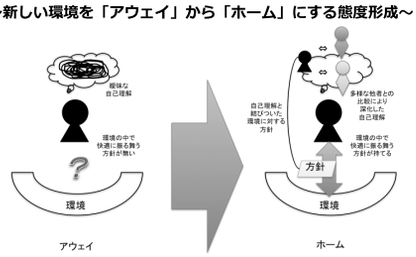
事例報告

１.初年次生向け キャリア教育ポータル科目の概要

12

科目の目標は？

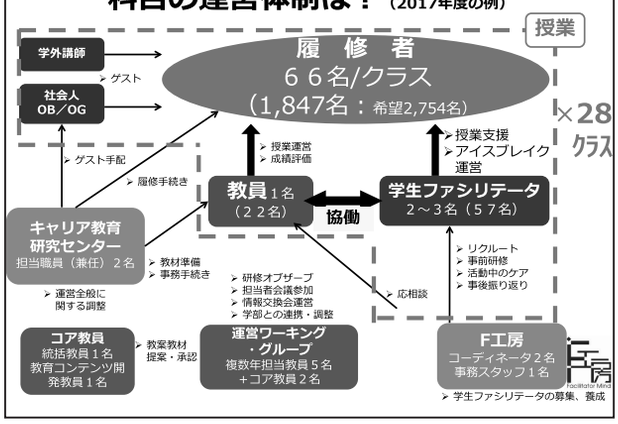
～新しい環境を「アウェイ」から「ホーム」にする態度形成～



「自分とはどのような人間か」「どのような大学生活を送るのか」を、様々な形のコミュニケーションやグループワークを通じて考え、自分なりに表現できることを目指します。大学という新たな環境（アウェイ）の中で、自己の特性とキャンパスという環境の両方を活かし、「４年間の大学生活」を自らうみだし、実行する力をつけましょう。

（「自己発見と大学生活」シラバスより）

科目の運営体制は？（2017年度の例）



科目の運営体制は？（2017年度の例）

- 教員は各学部から１名以上選出されている
- 教科書および運営者向けの教本が存在し、基本的な授業コンテンツや運営方法が共有されている
- 教員同士の定期的な情報共有の機会が設定され、ノウハウや課題の共有が行われている

事例報告

２.初年次生向けキャリア教育ポータル科目における学生参画

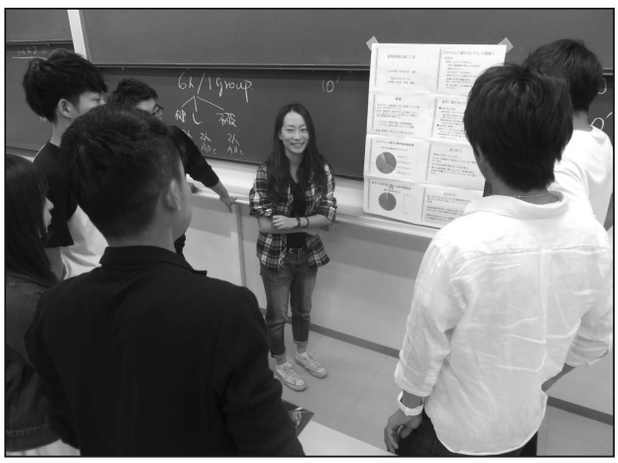
参画学生はどんな役割を担っている？

1）授業コンテンツの運営・仕切り
（アイスブレイク、自身の価値観を見つめるワーク等）

2）話題提供を通じた、学生生活のモデル提示
（大学生活の「学び方」「過ごし方」について）

3）グループワークの支援
（活動の見守り、発言の促し）

4）受講生の見守り、相談相手
（授業開始前、終了後の声かけ）



学生参画の広がりには、どのような経緯があった？

2006（H18）　自然発生的に学生参画が始まる

・ファシリテーションを組み込んだ低単位生向けキャリア科目において、元履修者が授業運営に参画。

2008（H20）　参画学生がチームを結成して活動

・授業に参画した学生数名がチームを結成。学生の活動を応援する学内補助金に採択。アイスブレイク等のコンテンツ開発・実践等のファシリテーション活動を展開。

2009（H21）　Ｆ工房の設立（学生支援ＧＰ）※H25以降は大学の予算で運営

・学生チームの活動を引き継ぎ、学生による授業参画がF工房の取り組みに位置づく。

2011（H23）　初年次向けキャリア教育ポータル科目の規模拡大

・キャリア教育ポータル科目の規模拡大（1クラス→11クラス）に伴い、F工房による参画学生の募集、コーディネートが始まる。

Facilitator Mind 21

参画学生をどのように集めているか？

・最終授業の場で、受講生の気持ちが高まっているときに告知をおこなう
（参画学生がチラシを配布し、呼びかける）

・受講生の気持ちがホットなうちに募集説明会を開き、少しでも興味があればとりあえず来てもらう

・選考はしないが、応募書類を出してもらう
（自主性を尊重するが、動機は明確にしてほしい）

Facilitator Mind 22

参画学生は、どのような動機で応募してくるか？

・授業で出会った先輩のようになりたい
人前で堂々と話す/楽しそう/先輩のおかげで場が和んだ…

・「何か」新しいことにチャレンジしたい
達成感を得たい/学生のうちに何かをやりとげたい/
サークルに入っていないので他学部の友人がほしい…

・成長したい、苦手を克服したい
視野を広げたい/伝える力をつけたい/コミュニケーション力をつけたい/
将来役に立つと思った/教員志望で…

Facilitator Mind 23

参画学生をどう支援しているか？（授業開始まで）

F工房が主導

・参画学生同士の関係性づくり（合宿など）
・ファシリテーションの技術・心がまえ習得
・個々人の目標の明確化
・参画学生との連絡調整

F工房と科目の統括教員との協働

・科目の目的理解
・モデルとしての準備を整える
・授業コンテンツの実践練習

Facilitator Mind 24

F工房は参画学生をどう支援しているか？
（授業開始後）

参画学生が、クラスの運営メンバーと「うまくやっていけるように」「個人で抱え込まないように」、情報を得やすい状況をつくり、必要に応じて教員と参画学生の間に入る。

1）不安やノウハウを共有できる場を設定する

2）打ち合わせスペースを解放・昼休みにスタッフが常駐し相談に乗る

3）報告書の提出を求める

Facilitator Mind 25

協働のスタイルには、どのようなものがあるか？

教員		参画学生
放任型	✖	提案型
主導型		指示待ち型
協働・育成型		

Facilitator Mind 26

受講生は参画学生をどう見ているか？

学ファシへのメッセージ
学ファシの方にわからないことを聞くと、すごく丁寧に教えてくださってとても嬉しかったです。この「**自己発見と大学生活」の授業のこと以外に、サークルについてもたくさん教えていただけて良かった**です。学ファシのおかげで自己大の授業が毎回楽しかったです。ありがとうございました！
学ファシさんの活動を見て、**私も新入生の力になりたいと感じるように**なりました。説明会に参加してみようと思います！
私は男子と話すのは苦手だったのですが、学ファシのお3方が助けてくださって、仲のいい女の友達も男の友達もできました。学ファシは友達同士のみでなく、**先生とも親しくなれるようにつないでくれる**と思いました。
学ファシのみなさんのおかげで毎週不安だったけど、**授業も安心して受けられるように**なりました。温かく見守ってくださってありがとうございました。

受講生向けアンケート（2017）より

Facilitator Mind 27

教員は、参画学生をどう見ているか？

学ファシ活動全体について、気づいた点
担当教員は、必ずしも本学学生の生々しい特徴に熟知しているわけではないが、**授業内容が学生生活を考えるという側面がある以上、学生の視点が欠かせない**。
学ファシと挨拶を交わしたり会話することで受講生との間に関係性ができ、**受講生の脱落防止につながっている**と思う。
私はなるべく学ファシが学生からリスペクトされるよう、意識的に演出するように心がけました。**身近な目標として意識してもらえるように、学ファシを教員である私自身がリスペクトしている姿を見せるように**しました。これは演技ではなく本当にリスペクトしているのですが、それを学生にも伝わるように振る舞いました。教員が学ファシを軽視しているような（実際はしていなくても）姿勢を見せてしまうと学生も学ファシをなめるようになると思ったからです。
場合によっては、学生に対して高圧的、抑圧的に振る舞う学ファシもいるかもしれません。その時は**教員がうまくコントロールする必要がある**だろうなと思います。「自己発見と大学生活」の精神ともっとも遠い態度だからです。

教員向けアンケート（2017）より

Facilitator Mind 28

参画学生は、授業における協働の体験をどうふりかえっているか？

学ファシ活動を通じて得たこと、学んだこと
自分の意見や説明がどうすれば相手に伝わりやすいか考えるようになったこと、周りを見て動くように注意するようになったことが学ファシ活動で成長できた部分だと思います。
先生が以前おっしゃっていた**「コミュニケーションをあきらめない」ということ**は、学ファシを通してとても大切なことだと学んだので、自分の中で大切にしていきたい考え方。協働することも今後活かしていきたい。
受講生への伝え方や人へ物事を伝えることの難しさが分かった。**世の中には色々な人がいて、人とどのように接すべきかということが分かった**。全体を見渡すことができるようになった。
学ファシを通じて、人の前に立って話す勇気を持つこと、観察する力を向上することができました。**はじめは、人前で話すことが苦手でできるだけやりたくないこと**でした。しかし、やらないといけない環境に身を置くことで慣れてきて、楽しくなってきました。そして、**多くの受講生と接していくうちに見る、聴く、話す力が向上した**と思います。

学ファシ向けアンケート（2017）より

Facilitator Mind 29

学生協働の成果は？

・受講生にとって、大学での学び方や過ごし方を考える上での参考（ロールモデル）になっている。

・受講生との距離の近さを活かして関係性をつくることで、授業に安心感が生まれている。

・授業に学生の視点を取り入れることができる。

・参画学生にとっては、他者とのかかわり方について考える機会になっている。

Facilitator Mind 30

一方で、教員の戸惑いは…

・「先輩風」を吹かせるだけの学生もいるような気が…。

・技術的にまだまだ未熟なのではないか…。

・どこまで求めていいのだろうか…。

教員向けアンケート（2017）より

31

F工房の苦労、悩みは…

・研修に欠席する、報告書が上がらないといったケースが毎年発生する…。

・「やらせる」にならないことを意識している。

・一方で「やってほしいこと」「到達してほしいレベル」があり、バランスが難しい。

32

参画学生を支援･コーディネートした職員の視点から…

事例報告

３.学生参画型授業が可能だった条件は？

33

考えられる有効となる条件

１）学生の自発的な活動が生まれる土壌

２）参画学生の主体性を尊重し、支援・育成する視点を持つ人・機関の存在

３）参画学生と教員との間に入り、緩衝材になる人・機関の存在

４）「憧れ」の連鎖
新入生→参画学生→参画学生（経験者）

34

参考になるかもしれない資料

・中沢正江、大谷麻予、中西勝彦、中西佳世子、松尾智晶、松高政、東田晋三、鬼塚哲郎「同一科目名・複数クラス開講科目の初年次教育の改善活動-データに基づく「自己発見と大学生活」の改善を例として-」『高等教育フォーラム第5号』,2015.3,p23-32

・大谷麻予、中西勝彦、松尾智晶「初年次キャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」キャリア科目担当学生ファシリテータ活動について」『高等教育フォーラム第4号』,2014.3,p71-80

35

学部独自の初年次プログラム（学部オリエンテーション）における学生参画
～コンピューター理工学部※の事例を中心に紹介～※2018年4月より情報理工学部

京都産業大学　教育支援研究開発センター　コーディネータ　大谷　麻予

第２３回ＦＤフォーラム
第１分科会

学部独自の初年次プログラム
（学部オリエンテーション）における学生参画

～コンピューター理工学部※の事例を中心に紹介～
※2018年4月より情報理工学部

京都産業大学
教育支援研究開発センターF工房
大 谷　　麻 予
2018年3月4日（日）

初年次プログラム（学部オリエンテーション）とは…？

入学前後に実施するプログラム。
各学部、様々な形で実施している。
F工房はこれまでに累計6学部と協働。

【目的】
・学部アイデンティティ形成
・大学生活の不安払拭
・友人づくり

【プログラム】
・新入生同士の自己紹介
・大学生活に関して話し合うワーク

【かかわっている人々】
・学部教員、学部職員、学部先輩学生、学生ファシリテータ

協働の状況

学部(全9学部)	F工房協働開始年度(学ファシ有)	学部職員	学部教員	学部先輩学生	他	備考
文化	2009~現在	○	○	○	×	学部開設時よりｵﾘｴﾝ有
法	2013	○	○	○	×	2014～学部で実施
コンピューター理工	2014～現在	○	○	○	×	2014は相談のみ
理	2015～現在	○	○	○	×	2014までは業務委託
外国語	2017～現在	○	×	×	ピアサポーター	2018は学ファシのみ
現代社会	2017	○	○	×		2017学部開設
経営	未					
経済	未					
総合生命	未					

※全学部それぞれ独自に行っている
実施内容、学生の参画の仕方
教職員の分担の仕方は様々である

新入生オリエンテーション
コンピューター理工学部の事例

学部行事「新入生オリエンテーション」（コンピューター理工学部）※2018～情報理工学部

- 位置づけ：学部の行事
- （実施時期：入学式前後3月末or4月初め)
  ※2017年度は4月2日12:00~14:00
- 対象：コンピューター理工学部新入生138名
- 実施目的：

①新入生が大学に入学するにあたり、
　同じ学部内の友人を作り新学期を迎えられるようにする。
②学部の先生や先輩方と知り合うことで、
　大学生活に馴染むきっかけを作る。

- 具体的に達成したいこと

同級生や先輩、先生方と知り合うことでスムーズに大学生活に移行できる状態になる。

- F工房の協働内容(2015年度～)：
  プログラムの検討、事前研修の実施、
  当日の サポート
- 実施形態：9クラス（各クラス新入生15名）
- 参画者：学生ファシリテータ　12名
  学部先輩学生・院生：14名
  学部教員：11名

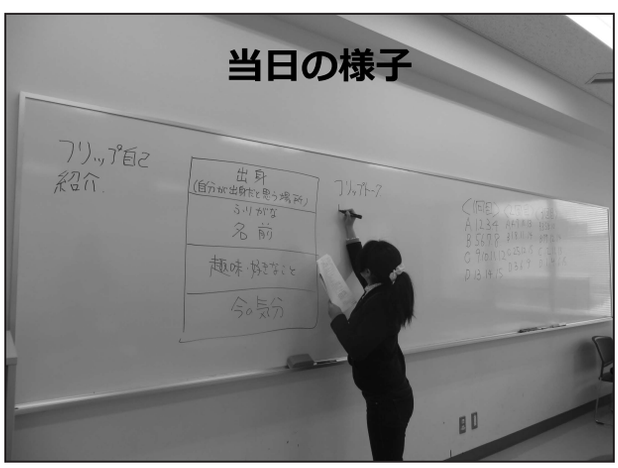
※各クラスに大体人数が均等になるよう配置
※学部職員（4名程）は記録撮影、誘導、備品管理

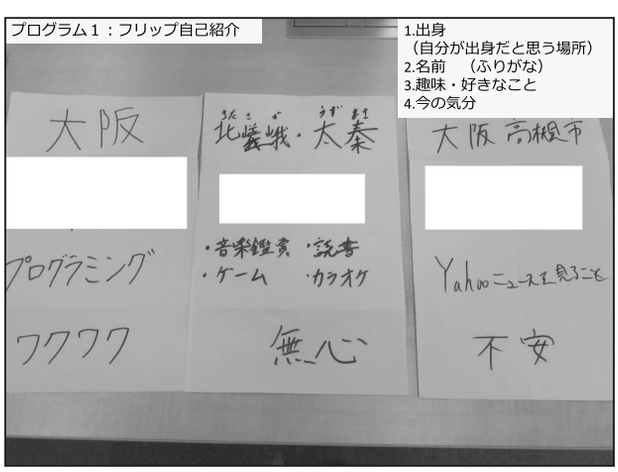
実施プログラム

時間配分	概要	詳細
5分	導入	実施目的、グラウンドルールの提示
20分	フリップ自己紹介（ペアワーク）	A4用紙を4つ折りにし、フリップに見立てて自己紹介をする「出身/名前（ふりがな）/趣味・好きなこと/今の気分」
5分	グループ分け	バースデーライン 3～4人　1チームを作る 全員に1～15まで通し番号を振る
55分	フリップトーク	お題について付箋に記入 A4用紙に貼り付けて、話しながら共有する。3セット実施する。（ほぼ全員とお話できるように番号を提示）共有後、メンバーの良いと思ったものに感想を添えながらイイネシールを貼る（お互いのいいところを称え合う文化作りを目指す）
25分	ふりかえり まとめ 履修相談の案内	フリップトーク時のA4用紙裏面に「今日の感想/大学生活で挑戦したいこと」を記入し、全体で円になり、イイネシールを貼られた部分を紹介して、裏面の内容を紹介する

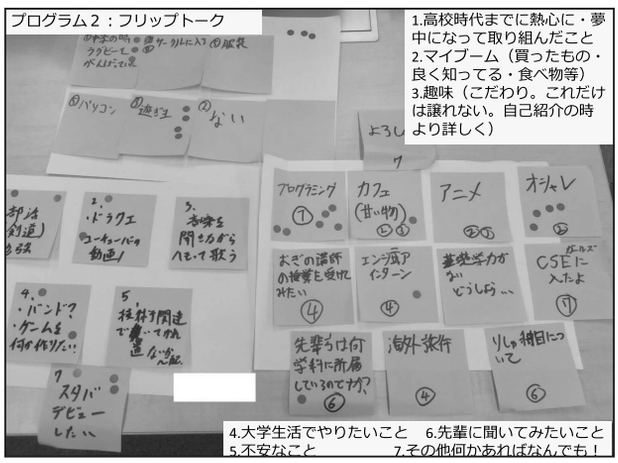
参画者　それぞれの役割

- 学部学生：運営・サポート
  （学部情報/勉強面/大学生活）
- 学部教員：クラスの見守り・サポート
  （学部情報/勉強面/大学生活）
- 学ファシ：運営・サポート（大学生活）
- 学部職員：学部スタッフ募集・当日準備見回り
- F工房：事前研修・当日見回り・ふりかえり
  （内容について意見収集）





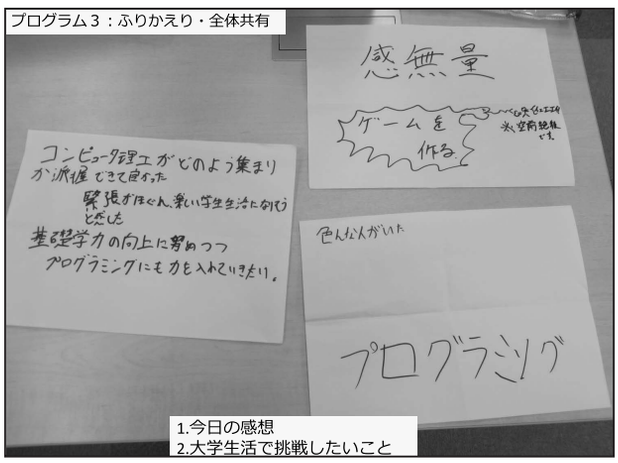
プログラム２：フリップトーク



1.高校時代までに熱心に・夢中になって取り組んだこと
2.マイブーム（買ったもの・良く知ってる・食べ物等）
3.趣味（こだわり。これだけは譲れない。自己紹介の時より詳しく）

4.大学生活でやりたいこと　6.先輩に聞いてみたいこと
5.不安なこと　7.その他何かあればなんでも！

プログラム３：ふりかえり・全体共有



1.今日の感想
2.大学生活で挑戦したいこと

結果
教員、先輩学生、学ファシの声

- 履修弱者を救えた
- 新入生に沢山話しかけることができた
- スタッフも楽しくできた
- 雰囲気が和気藹々としていたのできっかけ作りが出来てよかったと思った
- きっかけを作れたことで1年生同士で話題が作れた
- 新入生が疑問に思っている点についてヒントとなる情報提供をできた
- 緊張している新入生同士が効果的に楽しく会話できるようになっていた点がよかった
- パワーポイントを作成し、スライドにまとめて運営したので効率よく運営できた
- ＬＩＮＥ交換が起こってよかった
- 最後の感想でみんなが楽しかったと言ってくれてよかった

※終了後に実施したふりかえりシートより抜粋

結果　職員の声

- グループワーク実施前は、各教室でお互いに話す姿は見られませんでしたが、実施後は新入生同士がお互いの連絡先を交換し合ったりする姿が見られました。お互いを知るきっかけにはなったのでなないかと思います。
- 来年度の課題としては、コンピュータ理工学部（情報理工学部）の協力学生の確保です。他学部の先輩学生’（学ファシ）との交流ももちろんとても良いが、情報理工学部生として学修を進めていく上ではより多くの同じ学部の先生や先輩と顔見知りになっておくほうが良いかと思われます。学生の募集方法の改善が必要かと思われます。

※2017年度実施報告書より抜粋

Ｆ工房所感

・今年度初めて実施したアンケートより、新入生にとって満足度が高いプログラムであることが分かった。

・「入学前にこのような参加型のプログラムが必要だと思うか」という問いには、全員が「そう思う」と回答した。学生にとって早い段階で人間関係構築の機会があることが重要だということがわかった。

・例年オリエンを担当している教員、先輩学生、経験学ファシは運営に慣れてきている様子で、それぞれアレンジを行っていた。

・事前研修にて、教員、先輩、学ファシが各チームに分かれアイスブレイク体験と準備する時間を確保することでワークのイメージも掴みながらメンバーの親睦を図ることができた。

オリエン当日までの準備・連携

毎年の連携の流れ

- 12月頃～2月

-学部事務室職員、オリエン主担当教員、F工房スタッフで2～4回打合せ
(事前研修、当日日程決定、運営手引きの確認・内容の改善、準備物の確認)

- 12月～1月中

-教員・学部先輩学生・院生の募集（学部事務室）
-学生ファシリテータの募集（F工房）

- 3月中旬

-教員と学生への研修（F工房）

- 3月末or4月初め

-研修欠席者へのレクチャー
全体回遊・ふりかえり実施(F工房)
-本番（教員、学生が運営・サポート）

Facilitator Mind 19

コンピューター理工学部
～オリエン実現までの奮闘記2014～

Facilitator Mind 20

コンピューター理工学部の事例
協働が始まった発端　情熱の職員の存在

- 当時の学部事務室ご担当職員にインタビュー（若手女性職員）

-2011年コンピューター理工学部事務室に配属
入学後の懇親会の様子をみていたが...「見るにみてられん」
-当時の問題意識→留年退学の理由：友人できない。なじめない。
-2013年半ば改善を任される。2014年アクション開始
【思い】
-このままじゃいかん！どうにか変えたい！
【アクション】
-他大学の事例等を調べたりした
-オリエンが必要であるという根拠材料集め
-味方になってくれそうな先生からちょっとずつ巻き込む、1件1件研究室訪問＆説明
-F工房/初年次ポータル科目のことを知っていた
苦手な先生もマニュアルがあったらできるかも
→F工房に相談＆マニュアルづくり

Facilitator Mind 21

学生参画型オリエン
が可能だった条件は？

～4学部職員インタビューを踏まえて～
文化学部、コンピューター理工学部、理学部、外国語学部

Facilitator Mind 22

職員インタビューより見えてきた
実現を可能にした共通条件（大谷仮説）

- 日頃から教員や学生のことを把握している
「この人にだったら頼めそう！」
- 「入学時が肝心！」と意識している
→友人を作るためのきっかけを提供することに力を注げる。
準備は大変であるが投資する価値あり！
リターンが大きいと思っている職員の存在
（新入生への思いがある）
- 周りに理解者がいる。手伝ってくれる人、励ましてくれる、背中を押してくれる人がいる
- 参画する先輩学生、学ファシにとっても学びの機会であってほしいという願いを職員が持っている
- それぞれの視点から交換し作り上げる
（学部教職員、F工房スタッフ、学ファシ）

Facilitator Mind 23

法学部初年次ゼミ『プレップセミナー』および同科目で協働するＳＡを育成する科目『法教育演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』の事例

京都産業大学　法学部　教授　中井　　歩

Part 1　法学部における学生協働型授業の設置・改編の過程

（1）「法学部初年次ゼミ」とは？

・正式名称は「プレップセミナー」

1年次春学期開講、選択必修、自動クラス割り当て、1クラス25名程度

・その抱えていた課題

かつて1年次秋学期開講だったこともあり、内容にばらつきがあった

初年次のうちに法学部で学ぶために身につけておくべき基礎的な能力の修得が不十分

Teaching Assistant（TA・本学では有償）を導入したいが、それだけの資源がない

・協働学生であるStudent Assistant（SA）の導入

SAとしての実践に学習成果を認めて科目化する

・そのバックグラウンド

いくつかの先行事例があった（例えば、伊藤・吉永2013）

キャリア科目のファシリテータ経験者の先輩学生が初年次ゼミで支援

4年次ゼミ生が1年次配当の専門教育科目のレポートなどを検討、フィードバック

履修相談室の学生アドバイザー主催の1年次配当専門科目の勉強会の企画と実施

→　こうした先輩学生にも教育効果が十分に認められるという実践の蓄積があった

→　そこで、SAとしてのトレーニングと実践を学習成果として認めることで科目化（単位認定）することにした

但し、その前には、慎重な検討を行った

（実践が「実習」ではないようにするための別途の授業時間・学習時間の確保など）

（2）「初年次ゼミSA科目」とは？

・「法教育演習Ⅰ」＝秋学期、SAを養成する科目（翌年の春学期のための準備）

・「法教育演習Ⅱ」＝春学期、SAとして実践する科目

「初年次ゼミ」と「初年次ゼミSA科目」との関係については、【図①】を参照のこと

（3）SAの養成とパッケージ化

・はじめたこと＝「初年次ゼミ」の「パッケージ」化

・「初年次ゼミ」の「パッケージ」化を考えた理由

法学部初年次ゼミの内容が、バラバラのままでは、SAに教えるべき内容が定まらない

パッケージ化することで、SAが習得するべき内容＝初年次ゼミSA科目の内容が定まり、初年次ゼミの各クラスの担当教員もSAを活用しやすくなると考えた

・「パッケージ」化＝「初年次ゼミ」で何を教えるか？　何を教えないか？
　１回生の最初の段階で何を身につけるべきか？
　　知識の部分はe-ラーニングの新科目と役割分担ができる
　　技能：論理的な文章を読む・書く、論理的に話す・聞く
　　態度：現実の社会問題への関心（新聞の活用）
　　議論によってより良い答えに向かおうとする態度
　　（×　自分の意見に相手が同意しないのは、悪い人orバカだから）

・基本的な発想＝「型」を身につける
　例：「新聞要約課題」
　　「だろうかかたしなよ」小論文
　　簡略な形式（理由は２つまで、立論３回）のディベートのローカルルール
　　PC実習、学習支援システムmoodleの活用
　　図書館ガイダンス、キャリアガイダンス　－　学内の諸機関との接点
　　学期末の共通試験（要約と小論文）による到達度の評価

・「パッケージ」の教員への提示
　教材案やスケジュール案を提示して、担当教員がそれぞれに工夫して展開できるように

・「初年次ゼミ」で教えることを決めることから、「初年次ゼミSA」を育成
　＝初年次ゼミSA科目で到達するべき内容：
　　パッケージコースの内容についての理解
　　模範的な先輩学生になれるだけの能力と、なろうとする意欲
　　要約課題・小論文の添削をする能力
　　グループワークを促す、ファシリテータとしての能力
　→　これらについては各回の課題や最終レポートで書かせて評価を積み上げていく

（４）成果と課題
・「初年次ゼミ」に見られた成果
　　受講生からはSAのサポートが役に立ったという評価が圧倒的だった
　　受講生にとって、レポートの書き方などを身につけることができたと成長実感あり

・「初年次ゼミSA科目」に見られた成果
　　とくに１年目の「初年次ゼミSA科目」では、「パッケージ」の中身を受講生とともに作っていくことができた＝初年次「アクティブラーニング」科目の内容を、「アクティブラーニング」で作ることができた
　　学内の「F工房」と協働して「ファシリテーション」についての授業を「初年次ゼミSA科目」の中で展開している
　　例：ファシリテータとしての心構え、観察とフィードバックの重要性、
　　アイスブレイキングの企画と実践

・「初年次ゼミ」・「初年次ゼミSA科目」に見られた課題
　SA希望者（＝初年次ゼミSA科目の受講生）がなかなか増えなかった。（十数名程度）
　SAの支援をありがたいと思いつつ、自分たちにはできないだろうという反応が多い
→　「初年次ゼミSA科目」を増築した　→　【図②】を参照

・ばらつき問題
　SAの導入は全クラスで行われているわけではない
個々のSAの能力（「法教育演習Ｉ」を70点以上でクリアが条件ではあるものの）や、得意・不得意にはバラツキがあるので、教員とSAの相互が毎年、手探りでスタートしている

（５）まとめ
・「初年次SA科目」というアクティブラーニング科目を通じて、学生協働型授業である、「初年次ゼミ」のアクティブラーニングの内容（コンテンツ）を作ってきた
・さらに「初年次SA科目」自体も学生協働型授業にするべく、展開中である
　→　【図③】を参照のこと

Part２　学生協働型授業ができた条件についての考察

（１）いくつかの源流
・履修相談室の学生アドバイザー
・「キャリア教育ポータル科目」の学生ファシリテータ
・学生と協働する先行事例の存在（実践事例）
以上のことから･･･
→　学生が参画することに教育効果があることについて、認識していた
→　法学部のカリキュラム（あるいは教育意義）に位置づけた
　（かなり真剣に検討を行ったし、運営展開の中でも常に検討・工夫をしている）
　（注意！　ダメ・絶対：カネの代わりに単位で「学生を使おう」という発想）

（２）カリキュラム改革
・初年次教育の必要性・重要性の認識、一方で人的資源（TA・アルバイト）の不足
・カリキュラム改革の時期（場）と初年次教育・AL重視などの流れ（追い風）
以上のことから･･･
→　徹底的に「問題」「課題」「持っている資源」について話し合い、認識を共有
→　個別の実践経験を制度に昇華するための議論を行った
→　実施・展開のための教員（複数＝当初は3人）を手当てした
　（注意！　ダメ・絶対：やってくれる人に任せてしまう or 背負い込んでしまう）

（３）運営の持続可能性
・学生とも協働したが、「育成」科目では複数の担当教員で協働した
・SAを使った先生方に手応えを感じていただき、フィードバックがあった

・協働学生にも成長実感があり、教育効果が認められた
　→　各回について提出するレポートや、最終課題レポートなどで確認をして評価
・１回生にも教育効果があった
　→　「SAの支援は助けになった」と答える学生が大多数
・ファシリテーションについて相談・依頼できる部署があった
　→　本学ではF工房の存在が頼りになった（専門知識でも、授業運営でも）

Part３　指定討論者からの質問への回答

・どのような学生がSA科目を希望するのか？
　→「ロールモデル」になるような優秀な学生が比較的多いが、多様性もある
　→「法教育演習Ｉ」の中でもう一度トレーニングすることで、初年次ゼミで学ぶことの意義を教え、能力を向上させるようにしている
　　（初年次ゼミSA科目でも小論文・要約課題を毎週のように課している）

・学部内での位置づけは？
　→「論理的な文章を読む・書く」ことの支援を含む実践を通じた能力の習得は、法学部のカリキュラム・ポリシーに位置づけることができると考えており、設計段階から、あるいは現在も継続的に、法学部で学ぶことと関連づけるべく内容を検討して改善を試みている
　　また、態度としては、「対話」を通じた問題解決をしようとする姿勢も、法学部生としての基本的で重要な態度であると考えている
　　法学部はジェネラリスト養成の学部なので、SAの学習成果をカリキュラムの中に位置づけやすかったのかもしれない

・どうやってリクルーティングをしているのか？
　→「初年次ゼミ」の最後に声かけをするのには効果がある（教員とSAからそれぞれ）

・初年次ゼミSA科目の教員は、どれくらいコミットしているのか？
　→　担当曜日ごとに「初年次ゼミ」のSAたちがその日のお昼に集まってミーティングを行っている。初年次ゼミSA科目の担当教員は、その場に参加したり、ミーティングの記録を読んでコメントを返したりするなどの形で、コミュニケーションを取っている（moodleの掲示板機能も活用している）

・SAへの教育効果をどのように把握・評価しているのか？
　→　毎回についての「観察レポート」、SA活動全体についての「最終レポート」を通じて確認をして評価を行っている

・今後の課題は？
　→　プレップでの学習の意義を、初年次生にも理解を広げて浸透させていくことが課題

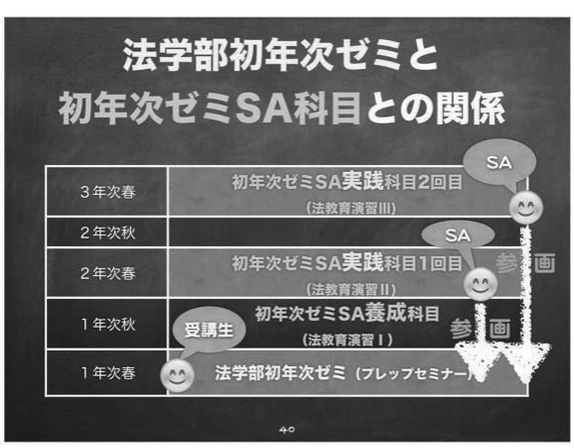
■参考文献

・伊藤 琴音、吉永 一行「法学部『プレップセミナー』におけるスチューデント・アシスタント(SA)の試み」『高等教育フォーラム』第3号（京都産業大学教育支援研究開発センター、2013年）

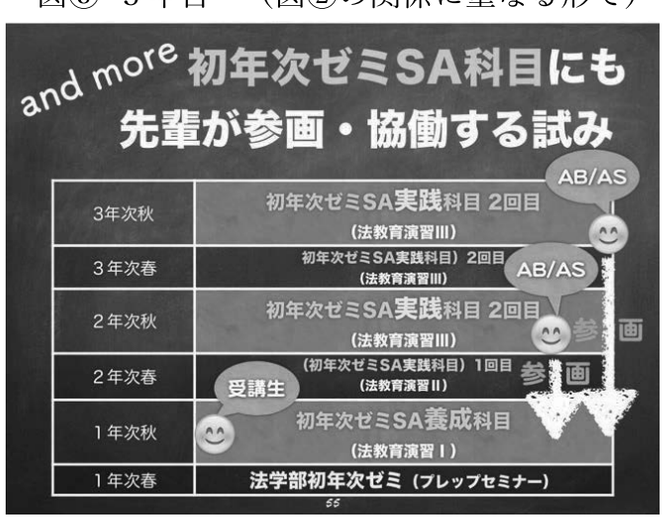
参考：初年次ゼミ「プレップセミナー」と初年次ゼミSA科目「法教育演習」の関連図

図① １年目～

図② ３年目～

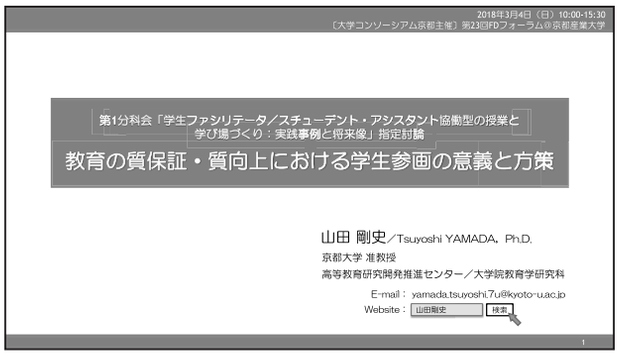


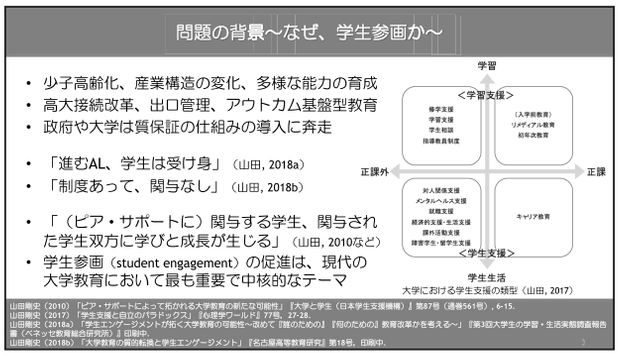
図③ ５年目～（図②の関係に重なる形で）

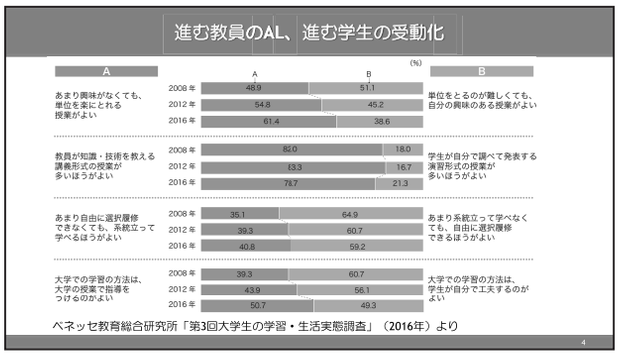


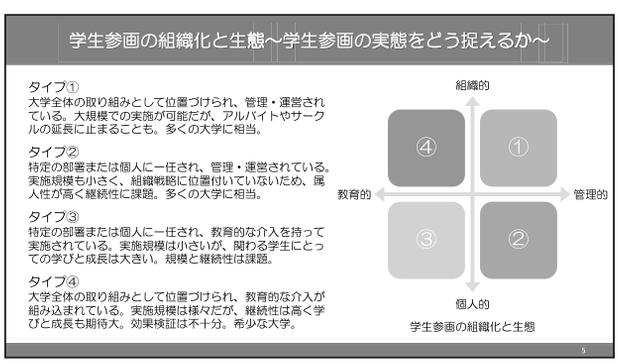
（指定討論）教育の質保証・質向上における学生参画の意義と方策

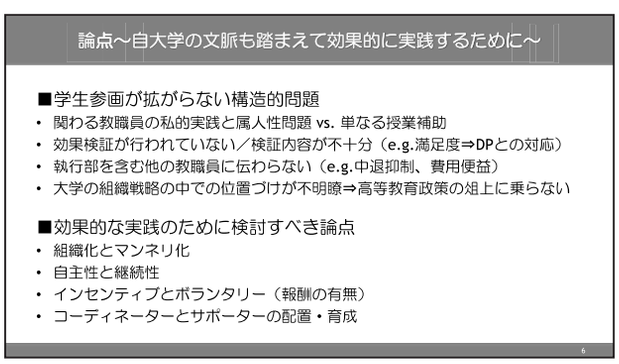
京都大学　高等教育研究開発推進センター　准教授　山田　剛史











（山田的）京産大の効果的実践のカラクリ

1. ハブとなる教員と職員の間（専門スタッフ）の配置
   専門部署の設置、教育支援と学生支援の双方を担当、多様なマッチング
2. 正課カリキュラムと連動／正課カリキュラムへの組み込み
   初年次教育（横）と専門教育（縦）の接続、全学と学部のバランス
3. 関係する教職員が学習・成長パラダイムに依拠している点
   学生の視点（能力育成の観点）から体系的なプログラムの開発・運営

- 特別なことはないが、実現させるのはなかなか困難。
- 戦略設計はもちろん、センスと熱量、多くのシャドーワークが必要。

7

登壇者への質問

（大谷さんへ）
Q. 新入生オリエンテーション前に関係づくりの場を設ける
⇒関係づくりが苦手な学生への対応は？難しさやポイントは？

（鈴木さんへ）
Q. どこまで「学ファシ」学生の個別問題に関わるのか？
⇒困難なケース。担当教員や職員、他部署との連携。

（中井先生へ）
Q. どんな学生が「SA科目」を希望されるのか？（学部内の位置づけ）
⇒「教育効果」をどのように把握・評価しているか、今後の課題は？
⇒他学部への展開可能性は？そのストラテジーは？（鬼塚先生）

8